

右肩上がりが増加する肺癌

～体にやさしい肺癌手術 Part2～



胸部外科 医師
渡邊 元嗣

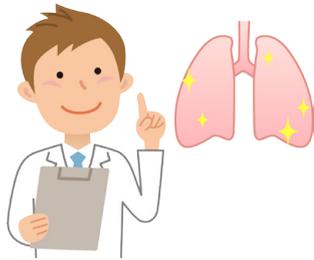
日本外科学会 専門医

肺癌の現状

現在日本人の死亡原因の第一位は癌であり、2人に1人が癌に罹患する時代になりました。数ある癌の中でも、肺癌は右肩上がりが増加してきています。

昔から肺癌はタバコとの関係性が強調されてきましたが、近年ではタバコとの直接的な関係の少ない腺癌というタイプの癌が増えてきています。しかし、技術の進歩によりCTも著しく進化しており、非常に早期の状態で発見されることも増えてきました。

肺癌の治療は大きく分けて「手術」「化学療法（抗癌剤）」「放射線療法」の3つがありましたが、近年では「免疫療法」も加わり4種類となりました。これらの選択肢の中から、癌の進行状況に応じて最も良い治療法を選択していくことになります。それでも、癌を治す、という観点において最も良いのは、早期に発見して手術して切除してしまうことです。



肺癌の手術

肺癌の標準的な手術は、癌の存在する場所（右肺が3つ、左肺が2つの「肺葉」というものに分かれます）を切除する「肺葉切除」と周囲のリンパ節を一緒に切除する「リンパ節郭清」が基本となります。しかしながら、この岩国地域では患者さんの平均年齢が高く、標準的な手術を行うと手術後の呼吸機能が芳しくないことが予想されることがあります。

そのため、当院では2012年以降、体への負担を減らすために胸腔鏡という機械を用いて傷を小さくすること、区域切除といって肺葉切除よりも切除範囲を可及的に小さくすること、の2方向の面から体にやさしい手術を目指してきました。

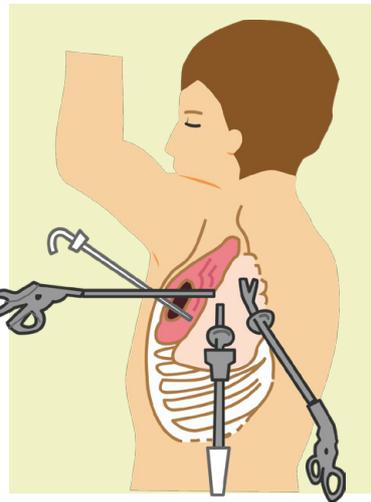
胸腔鏡下手術

以前は、胸の横を20cm以上切開して肺を切除する開胸手術を行っていました。もちろん、今でも癌が大きい場合や特殊な場合は開胸手術が必要ですが、近年検診などで発見されて受診してこられるような方の小型の肺癌に対しては「胸腔鏡」を用いた手術を行っています（図1）。全身麻酔下に胸に4か所1-3cmほどの穴をあけ（図2）、胸腔鏡という「カメラ」で中を映し出して手術を行います。

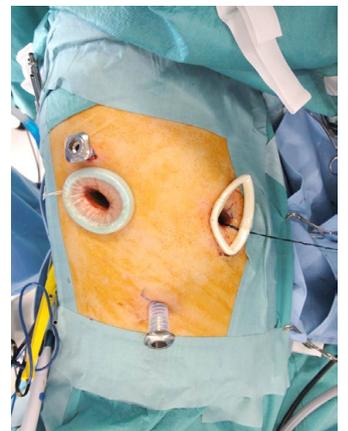
「胸腔鏡」も技術の進歩に伴いシステムが向上しており、肉眼で見るよりも細かい部分まで拡大して見ることが出来るようになってきました。そのため、場合によっては開胸手術よりも安全である部分も増えてきました。

また、肺癌だけでなく縦隔（右と左の肺に囲まれた心臓の近くの組織）に対する手術も、以前のように骨を切ったりすることなく行うことが出来るようになってきました。

【図1 胸腔鏡下手術】



【図2 当院の創部の写真】



区域切除術

肺癌に対する手術は、前述のように「肺葉切除」です（図3）。しかし、肺癌を治すという目的のために肝心の「日常生活に復帰する」という目標が達成できなければ意味がありません。そこで、早期の肺癌に対して肺葉よりも細かい分類である「区域」に注目して切除する区域切除を行っています（図4）。これにより、出来るだけ肺癌に対する根治性を保ちつつ呼吸機能を温存できるようになりました。

当院ではここ数年、毎年200名以上の方が肺癌及び他の病気に対する手術を受けておられますが、手術後に※1在宅酸素療法を必要とされた方はほとんどおられません。一時的に必要とされた方も、その後リハビリを続けて酸素投与が不要となられています。

※1…自宅に酸素を供給する機械を置き、必要に応じて酸素を自宅や外出先で吸入する治療

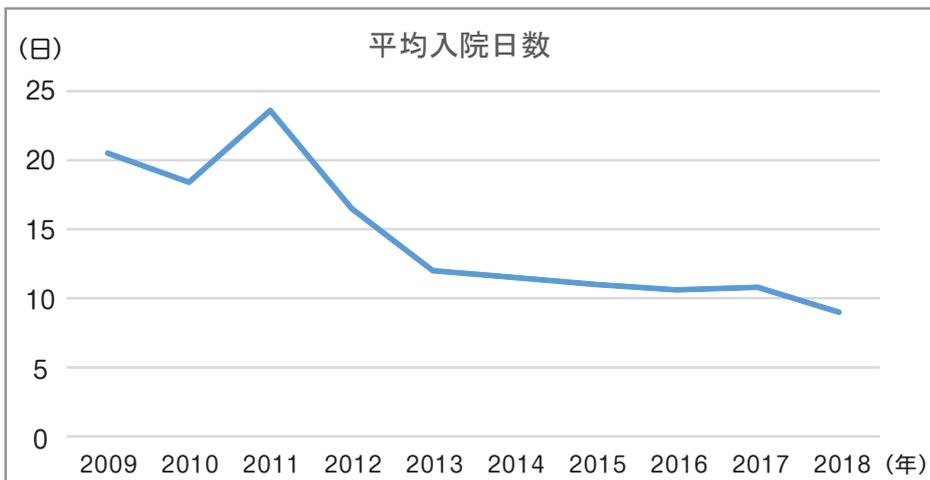
当院の肺癌治療

当科では「体にやさしい肺癌手術」を謳^{うた}っています。データとして平均入院日数の変遷をお示しします（図5）。2012年以降、入院期間が約半分になっていることがわかります。もちろん個人差はありますが、昔と比較して早期に回復して退院されています。

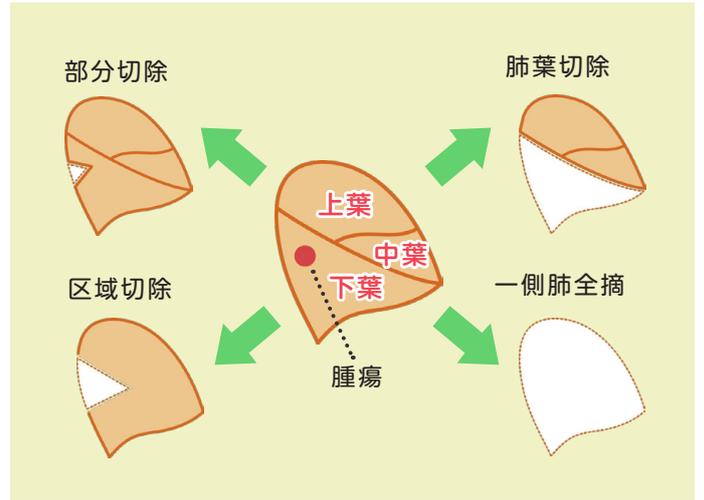
また、当院では毎週「胸部外科」「呼吸器内科」「放射線科」の3科の医師が集まってカンファレンスを行っています。それにより、一人一人の患者さんに一番良い治療方針を相談しております。そして、手術が必要な方に関しては胸部外科の3人の医師で、最も適していると考えられる手術方法を相談して決めております。

その他にも、病棟にて他職種ともカンファレンスを行い、患者さんの体の回復から心のケアに関しても相談を行っています。チーム医療にて、皆さんに最良の医療を提供できるよう心がけています。

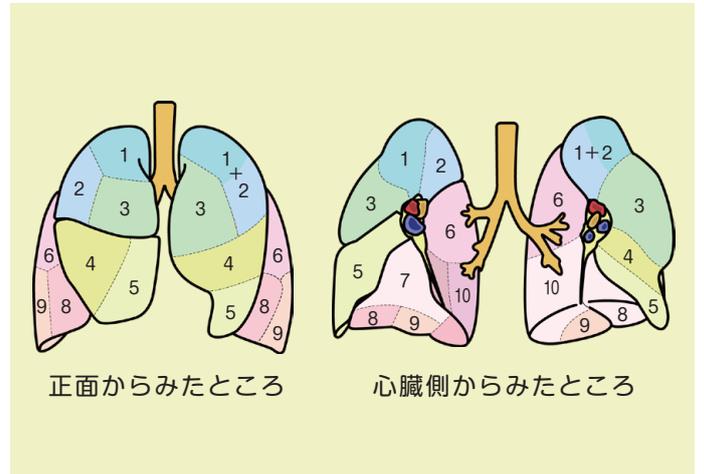
【図5 平均入院日数の変換】



【図3 肺癌手術の切除範囲】



【図4 肺の区域】



「肺炎と思っていたら、実は癌だった」こういったケースも増えてきています。気になることがあれば、一度当院を受診下さい。我々は常に全力で診療にあたります。

また、その際はかかりつけ医の紹介状をお持ちいただければと思います。

